

# 月夜のでんしんぼしら

宮沢賢治

青空文庫





つまりシグナルがさがったというだけのことです。一晩に十四回もあることなのです。ところがそのつぎが大へんです。

さつきから線路の左がわで、ぐわあん、ぐわあんとうなっていたでんしんばしらの列が  
大威張りおおいばで一ぺんに北のほうへ歩きだしました。みんな六つの瀬戸せとものエボレットを飾かぎ  
り、てっぺんにはりがねの槍やりをつけた亜鉛とたんのしゃつぽをかぶって、片脚かたあしでひよいひよ  
やうて行くのです。そしていかにも恭一むかしをばかにしたように、じろじろ横めでみて通りす  
ぎます。

うなりもだんだん高くなつて、いまはいかにも昔ふうの立派な軍歌に変わってしまいま  
した。

「ドツテドツテテ、ドツテテド、

でんしんばしらのぐんたいは

はやさせかいにたぐいなし

ドツテドツテテ、ドツテテド

でんしんばしらのぐんたいは

きりつせかいにならびなし。」

一本のでんしんばしらが、ことに肩かたをそびやかして、まるでうで木もがりがり鳴るくらいにして通りました。

みると向うの方を、六本うで木の二十二の瀬戸もののエボレットをつけたでんしんばしらの列が、やはりいっしょに軍歌をうたつて進んで行きます。

「ドツテテドツテテ、ドツテテド

二本うで木の工兵隊

六本うで木の竜騎兵りゆうきへい

ドツテテドツテテ、ドツテテド

いちれつ一万五千人

はりがねかたくむすびたり」

どういうわけか、二本のはしらがうで木を組んで、びっこを引いていっしょにやってきました。そしていかにもつかれたようにふらふら頭をふつて、それから口をまげてふうと息を吐つき、よろよろ倒たおれそうになりました。

するとすぐうしろから来た元気のいいはしらがどなりました。

「おい、はやくあるけ。はりがねがたるむじやないか。」

ふたりはいかにも辛<sup>つら</sup>そうに、いつしよにこたえました。

「もうつかれてあるけない。あしさが腐<sup>くさ</sup>り出したんだ。長靴<sup>ながぐつ</sup>のタールもなにももうめちやくちやになつてゐるんだ。」

うしろのはしらはもどかしそうに叫<sup>さけ</sup>びました。

「はやくあるけ、あるけ。きさまらのうち、どつちかが参つても一万五千人みんな責任があるんだぞ。あるけつたら。」

二人はしかたなくよろよろあるきだし、つきからつきとはしらがどんどんやつて来ます。

「ドツテテドツテテ、ドツテテド

やりをかざれるとたん帽<sup>ぼう</sup>

すねははしらのごとくなり。

ドツテテドツテテ、ドツテテド

肩にかけたるエボレット

重きつとめをしめすなり。」

二人の影<sup>かげ</sup>ももうずうつと遠くの緑<sup>ろくしやう</sup>青<sup>あお</sup>いろの林の方へ行つてしまい、月がうろこ雲か  
らぱつと出て、あたりはにわかにも明るくなりました。

でんしんばしらはもうみんな、非常なご機嫌きげんです。恭一の前に来ると、わざと肩をそびやかしたり、横めでわらったりして過ぎるのでした。

ところが愕おどろいたことは、六本うで木のまた向うに、三本うで木のまつ赤なエボレットをつけた兵隊があるということです。その軍歌はどうも、ふしも歌もこつちの方とちがうようでしたが、こつちの声あまり高いために、何をうたっているのか聞きとることができませんでした。こつちはあいかわらずどんどんやって行きます。

「ドツテテドツテテ、ドツテテド、

寒さはだえをつんざくも

などで腕木うでぎをおろすべき

ドツテテドツテテ、ドツテテド

暑さ硫黄をとかすとも

いかでおとさんエボレット。」

どんどんどんやって行き、恭一は見ているのさえ少しつかれてぼんやりなりました。でんしんばしらは、まるで川の水のように、次から次とやって来ます。みんな恭一のこ

とを見て行くのですけれども、恭一はもう頭が痛くなつてだまって下を見ていました。

俄かに遠くから軍歌の声にまじって、

「お一二、お一二、」というしわがれた声がきこえてきました。恭一はびっくりしてまた顔をあげてみますと、列のよこをせいの低い顔の黄いろなじいさんがまるでぼろぼろの鼠ねずみいろの外が套とうを着て、でんしんばしらの列を見まわしながら

「お一二、お一二、」と号令をかけてやってくるのでした。

じいさんに見られた柱は、まるで木のように堅かたくなつて、足をしやちほごばらせて、わきめもふらず進んで行き、その変なじいさんは、もう恭一のすぐ前までやってきました。そしてよこめでしばらく恭一を見てから、でんしんばしらの方へ向いて、

「なみ足い。おいつ。」と号令をかけました。

そこででんしんばしらは少し歩調を崩くずして、やっぱり軍歌を歌って行きました。

「ドツテテドツテテ、ドツテテド、

右とひだりのサアベルは

たぐいもあらぬ細身なり。」

じいさんは恭一の前にとまって、からだをすこしかがめました。

「今晚は、おまえはさつきから行軍を見ていたのかい。」

「ええ、見てました。」

「そうか、じゃ仕方ない。ともだちになろう、さあ、握手あくしゅしよう。」

じいさんはぼろぼろの外套の袖そでをはらつて、大きな黄いろな手をだしました。恭一もしかたなく手を出しました。じいさんが「やつ、」と云いつてその手をつかみました。

するとじいさんの眼だまから、虎とらのように青い火花がぱちぱちつとでたとおもうと、恭一はからだがりりつとしてあぶなくうしろへ倒れそうになりました。

「ははあ、だいぶひびいたね、これでごく弱いほうだよ。わしとも少し強く握手すればまあ黒焦くろくげだね。」

兵隊はやはりずんずん歩いて行きます。

「ドツテドツテ、ドツテド、

タールを塗ぬれるなが靴くつの

歩あはばは三百六十尺。」

恭一はすっかりこわくなつて、歯ががちがち鳴りました。じいさんはしばらく月や雲の工合ぐあいをながめていましたが、あまり恭一が青くなつてがたがたふるえているのを見て、気の毒になつたらしく、少ししずかに斯こう云いました。

「おれは電気総長だよ。」

恭一も少し安心して

「電気総長というのは、やはり電気の種類ですか。」とききました。するとじいさんはまたむつとしてしまいました。

「わからん子供だな。ただの電気ではないさ。つまり、電気のすべての長、長というのはかしらとよむ。とりもなおさず電気の大將ということだ。」

「大將ならずいぶんおもしろいでしょう。」恭一がぼんやりたずねますと、じいさんは顔をまるでめちやくちやにしてよろこびました。

「はっはっは、面白おもしろいさ。それ、その工兵も、その竜騎兵も、向うのてき弾だん兵へいも、みんなおれの兵隊だからな。」

じいさんはふつとすまして、片っ方の頬ほおをふくらせてそらを仰あおぎました。それからちやうど前を通って行く一本のでんしんばしらに、

「こらこら、なぜわき見をするか。」とどなりました。するとそのはしらはまるで飛びあがるぐらいびつくりして、足がぐにやんとまがりあわててまっすぐを向いてあるいて行きました。次から次とどしどしはしらはやって来ます。

「有名ななしをおまえは知ってるだろう。そら、むすこが、England、Londonにいて、おやじがスコットランド、カルクシャイヤにいた。むすこがおやじに電報をかけた、おれはちゃんと手帳へ書いておいたがね、」

じいさんは手帳を出して、それから大きなめがねを出してもっともらしく掛<sup>か</sup>けてから、また云いました。

「おまえは英語はわかるかい、ね、Send、マイブーツ、インスタンテウリイすぐ長靴送れとこうだろう、するとカルクシャイヤのおやじめ、あわてくさっておれのでんしんのはりがねに長靴をぶらさげたよ。はつはつは、いや迷<sup>めいわく</sup>惑<sup>わく</sup>したよ。それから英国<sup>えいこく</sup>ばかりじゃない、十二月ころ兵營へ行<sup>い</sup>つてみると、おい、あかりをけしてこいと上等兵<sup>じょうへい</sup>殿<sup>どの</sup>に云われて新兵が電燈をふつふつと吹<sup>ふ</sup>いて消<sup>け</sup>そうとしているのが毎年五人や六人はある。おれの兵隊にはそんなものは一人もないからな。おまえの町だつてそうだ、はじめて電燈がついたころはみんながよく、電気会社では月に百石<sup>ひゃくせき</sup>ぐらい油をつかうだろうかなんて云つたもんだ。はつはつは、どうだ、もつともそれはおれのように勢力不滅<sup>ふめつ</sup>の法則<sup>はふそく</sup>や熱力学第二則<sup>ねつりきがくだいに</sup>がわかるとあんまりおかしくもないがね、どうだ、ぼくの軍隊は規律がいいだろう。軍歌にもちやんとそう云つてあるんだ。」

でんしんばしらは、みんなまつすぐを向いて、すまし込んで通り過ぎながら一きわ声を  
はりあげて、

「ドツテドツテテ、ドツテテド

でんしんばしらのぐんたいの

その名せかいにとどろけり。」

と叫びました。

そのとき、線路の遠くに、小さな赤い二つの火が見えました。するとじいさんはまるで  
あわててしまいました。

「あ、いかん、汽車がきた。誰かに見附たれみかつたら大へんだ。もう進軍をやめなくちやいか  
ん。」

じいさんは片手を高くあげて、でんしんばしらの列の方を向いて叫びました。

「全軍、かたまれい、おいつ。」

でんしんばしらはみんな、ぴつたりとまって、すっかりふだんのとおりになりました。  
軍歌はただのぐわあんぐわあんといううなりに変わってしまった。

汽車がごとくやってきました。汽缶車きかんしゃの石炭はまつ赤に燃えて、そのまえで火夫は足

をふんばつて、まつ黒に立っていました。

ところが客車の窓がみんなまつくらでした。するとじいさんがいきなり、

「おや、電燈が消えてるな。こいつはしまった。けしからん。」と云いながらまるで兎うさぎのようにせ中をまんまるにして走っている列車の下へもぐり込みました。

「あぶない。」と恭一がとめようとしたとき、客車の窓がぱつと明るくなって、一人の小さな子が手をあげて

「あかるくなつた、わあい。」と叫んで行きました。

でんしんばしらはしずかにうなり、シグナルはがたりとあがつて、月はまたうろこ雲のなかにはいりました。

そして汽車は、もう停車場ていしやばへ着いたようでした。



# 青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

初出：「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部・東京光原社

1924（大正13）年12月11日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年1月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 月夜のでんしんばしら

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>